



河小だより



四日市市立河原田小学校
学校通信 第18号
令和4年 9月 7日(水)
文責 校長 鳥居 純樹

長い夏休みが終わり、元気な子どもたちの姿が河原田小学校に戻ってきました。大きな荷物を重そうにもち、がんばって登校しました。低学年の子どもたちは、荷物をもって歩くのが大変な様子でした。同じ班の高学年の子どもたちが、低学年の荷物をもって汗をかきながら登校している様子が見られ、高学年の子どもたちのやさしさ、思いやりの姿がうかがえました。



こんな素晴らしい姿を広げていきたいと思います。高学年の子どもたちのモデルとなる姿は頼もしく感じます。

始業式にて

二学期の始業式も一学期の終業式に続き、オンラインでの実施となりました。校長の話については、第17号のとおりです。二学期からは、子どもたちが表現する機会として、集会等を活用して自分の思いを話す場面を設定します。



今回の始業式は、第一弾として6年生の代表委員の4名に校長室にきてもらい、二学期の目標をみんなの前で（オンラインでしたが）話してもらいました。代表委員会4名には、当日の朝、始業式で話をするよう担任から伝えてもらいましたが、子どもたちはそんな急遽決まったことでもしっかりと話をする事ができ、「さすが6年生」という姿を見せてくれました。

「たくさんの行事を楽しみたい」「そうじを一生懸命がんばり、みんなのために働きたい」「発表が苦手なので授業中発表をしていきたい」など自分の目指すべき姿をしっかりとイメージして話をしました。今後、集会などでもこのような機会を設けて子どもたちの表現力育成に努めるとともに、子どもたちのがんばりを認めてもらう機会として自尊感情を高めていきたいと考えています。



メモに目標を書いて持ってきた人もいましたが、話をするときには、誰一人メモを見ないで自分の言葉で二学期の目標を話しました。



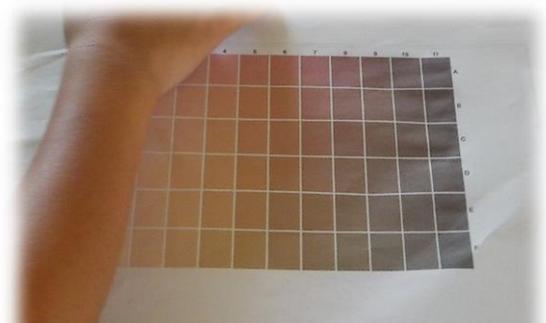
差別を許さない取り組み

一学期末の下校時に低学年の子が人権侵害にあたる発言を複数人から受けるといういじめ行為にも該当する出来事があり、二学期早々に各学級で道徳の授業実践をして、子どもたちとともにいじめやちがいでについて考えました。



1年生では、両腕がないたけしくんが掃除の時間に困っている姿に対して周りの子が「さぼるな」ときつく言っている絵から考えていきました。

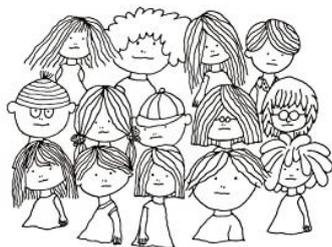
2年生では、肌の色について自分の肌を確認して「ふつう」とは何かを考えました。「ふつう」について他の学年でも考えていました。



わたしのせいじゃない

— せきにんについて —

レイフ・クリスチャンソン 文
にもんじ まるあき 絵
ディック・スタンプベリ 監



「おおぜいでやっていたのよ。ひとりではとめられなかった。わたしのせいじゃないわ。」「おおぜいでたたいた。みんなたたいた。ぼくもたたいた。でもすこしだけだよ」

みんな「わたしのせいじゃない」といっています。本当にそうなのかみんなで考えました。その場にいたらどうしますか？

全学級での実践を見て、子どもたちが真剣に考えている姿がとてもうれしく思いました。「ふつう」という言葉についても、時代や場所が変われば「ふつう」のことが「ふつう」ではなくなります。私たち日本人が欧米諸国に行けば、少数民族になり、肌の色も周囲とは違ってきます。そんなときに少数民族だからこそ、正しいことを判断して行動できる力をつけるとともに仲間をふやせるような力をつけていきたいと思ひます。河原田小学校で悲しい思いをする人がないように日々の授業で子どもたちに力をつけていきたいと考えています。

5・6年生対象に市でのいじめ防止対策事業としてゲストティーチャーの方に来ていただき、「脱いじめ傍観者教育」というテーマで「ライン」でのいじめの書き込みについて考えました。クラスの友達に対しての書き込みをするのか、しないのかという立場で考えました。



コロナ感染した人に対しても今なお心無い発言があるケースも報道されています。自分ごととして、相手の気持ちを考えて行動できるようにして、みんなが気持ちよく笑顔で過ごせるようにいじめや差別のない学校にみんなの力でしていきたいです。